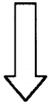


川崎病の突然死予防に関する研究

班員	東京女子医大小児科	草川三治
協同研究者	群馬大病理	大根田玄寿
	日赤医療センター小児科	川崎富作
	国立予防衛生研究所	江頭靖之
	日大小児科	大國真彦
	自治医大公衆衛生	柳川洋
	東京医科歯科大小児科	矢田純一
	東京女子医大循環器外科	須磨幸蔵
	聖マリアンナ医大病理	直江史郎
	横浜市立医大細菌	田所一郎
	京都大学小児科	奥田六郎
	京都大学病理	浜島義博
	久留米大学小児科	加藤裕久

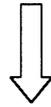
昨年度より始まった本研究は第2年度に入り、前年に引続き突然死の一次予防としての病因、発症機構の問題、二次予防としての治療の問題、さらに三次予防に関して後遺症の有無の判定、管理に関する問題などが追究された。今年度の新しい知見としては死亡票からの疫学調査で死亡数としては減少していないこと、臨床所見で皮膚の無菌性小膿疱が5~10%に見られることが確認され、また尿中白血球の意義が多少解明され、予後判定にも関係があるか？という所見が得られたこと、さらに関節炎で無菌性の関節穿刺液が得られることが判明したことなどがある。免疫学的研究では血清中の免疫複合体が抑制細胞を活性化するという事実が判明した。治療では病初期アスピリンの吸収が極めて悪く、血中濃度を20 mg/dl以上にするためにはかなりの大量(0.1~0.15 g/kg/日)が必要であること、ところがこの大量を用いると血小板機能を抑制する作用が無くなるという仮説が出されたことなどである。最後に病理学的には動脈瘤の発生機構が検討され、実験的には患者から採取したカンジダ菌体成分の注射でマウスに川崎病とよく似た冠動脈瘤を発生させることができたことは新しい収獲であった。

以上の結果から来るべき年度において、少なくとも現時点における診断、治療の方法の確立、長期予後及び管理方法の確立に対して明るい見通しが得られたと考えている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昨年度より始まった本研究は第 2 年度に入り,前年に引続き突然死の一次予防としての病因,発症機構の問題,二次予防としての治療の問題,さらに三次予防に関して後遺症の有無の判定,管理に関する問題などが追究された。今年度の新しい知見としては死亡票からの疫学調査で死亡数としては減少していないこと,臨床所見で皮膚の無菌性小膿疱が 5~10%に見られることが確認され,また尿中白血球の意義が多少解明され,予後判定にも関係があるか?という所見が得られたこと,さらに関節炎で無菌性の関節穿刺液が得られることが判明したことなどがある。